
2014年4月24日

文部科学省

「**リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備**」

(**リサーチ・アドミニストレーションシステムの整備**)

中間評価ヒアリング

**東京女子医科大学：
URA事業の進捗状況について
(事業タイプ: 専門分野強化)**

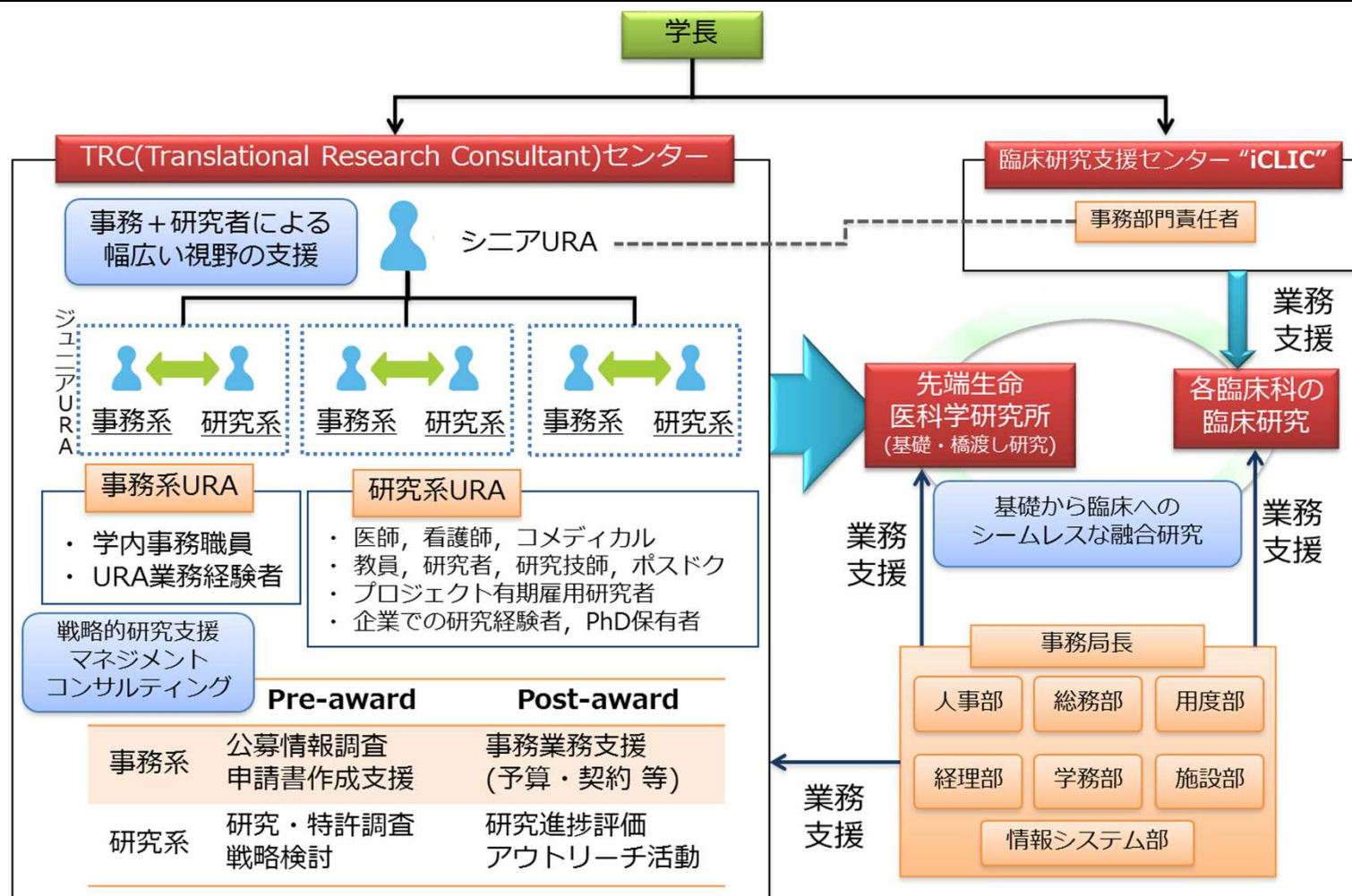
東京女子医科大学

概要

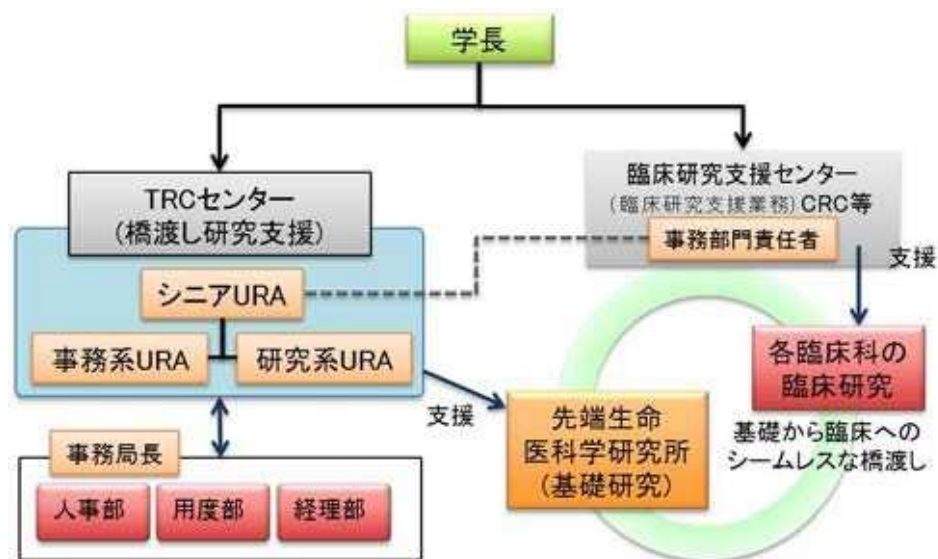
1. URA組織体制整備構想の進捗状況について
2. URAの職務環境等整備の進捗状況について
3. URAシステムの定着・運営の安定化に関する取組状況
4. URAシステム整備（改革）に対する学長及び関係役員の責務について

1. URA組織体制整備構想の進捗状況について

専門性の高い職種としてのURAシステム整備、研究力強化等への貢献 URA組織体制・機能の整備（1）



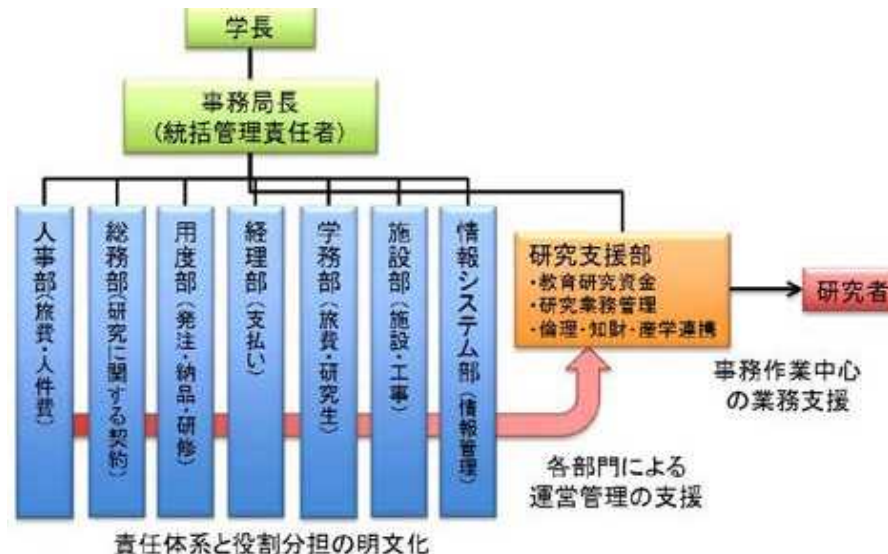
専門性の高い職種としてのURAシステム整備、研究力強化等への貢献 URA組織体制・機能の整備（3）



【図1：目下構想中のTRCを主軸とした体制】

TRCセンター構想：

従来の関連事務部署はもとより、先端生命医科学研究所、臨床研究支援センター、各臨床科との連携を深化。基礎研究から臨床応用への橋渡しを積極的に支援、最先端の研究成果を効率的かつ円滑に臨床につなげるべく、市場化までを見据えた戦略策定、臨床・技術・ビジネス・関係法規等の多岐に渡るマネジメント業務を展開。



【図2：従来の機関内管理体制】

従来の研究支援部：

「教育研究資金」「研究業務管理」「倫理・知財・産学連携」の3部門から構成。

pre-awardに相当する申請支援、post-awardに相当する資金管理、研究施設・設備の管理や知財などに関する支援業務を遂行。

専門性の高い職種としてのURAシステム整備、研究力強化等への貢献 URA組織体制・機能の整備（2）

1) 事務系業務の経験を有する「事務系URA」と、研究経験を有する「研究系URA」から構成されるチーム体制を編成。

⇒本学研究支援部事務職員8名から1名をシニアURA、7名を事務系URAとして配置替えの形で自主雇用。補助事業で採用のURAは本学の新職種である「リサーチ・アドミニストレーター」とすることで、学内の承認を得た。

◎事務系URA：競争的資金等の研究経費の取扱い、知財・産学連携等の実務に熟達した人材を中心に構成。

◎研究系URA：医学・工学・理学、薬事・倫理／コンプライアンス等、豊富な研究経験を有する人材によって構成、主に研究プロトコル策定やマネジメントに係る支援業務に従事。

⇒本学の研究評価・分析データや特許出願状況のデータを学内の研究系、事務系URAで共有できるように学内に共有サーバを整備。

2) 昨年の上長・学長／研究支援部長の交代に伴い、新時代の医学系大学に相応しいTRC（Translational Research Consultant）センター構想をさらに吟味・検討。目下、設置規程・人事規程整備に向けた学内調整に取り組む。

専門性の高い職種としてのURAシステム整備、研究力強化等への貢献 情報発信の取り組み状況

本学URA事業専用のウェブサイト作成。大学トップページからリンクされる形で公開。

URAという新規性に富む高度な専門職人材を学内外に印象付けるべく、デザインの工夫についての協議を重ねて実現。

URA専用の問い合わせ窓口：一方向的な情報発信にとどまることなく、双方向的なコミュニケーションも可能となっている。

facebookやtwitterといったインターネット上のコミュニケーションツールによる情報発信も試みている。

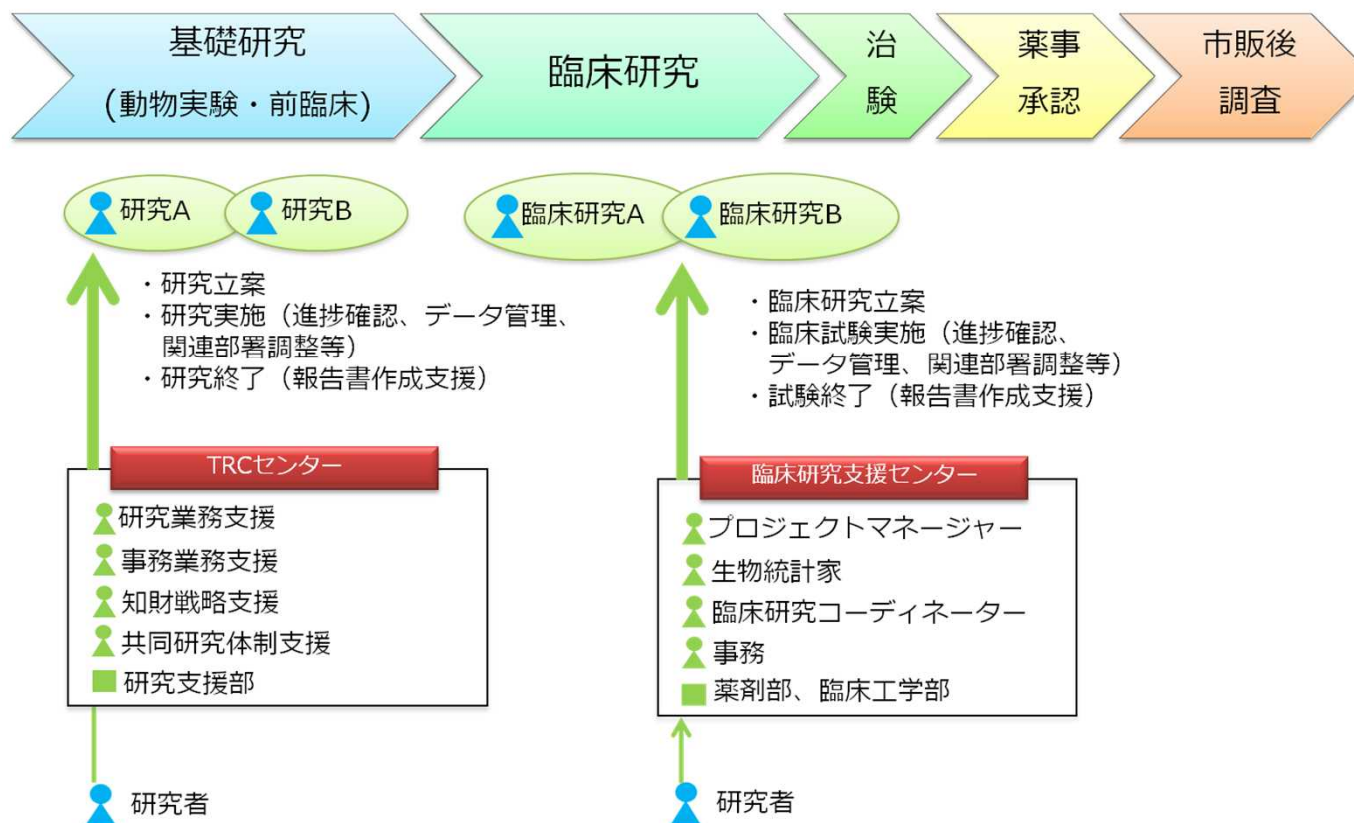


文部科学省「リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備」(リサーチ・アドミニストレーションシステムの整備)中間評価 ヒアリング
東京女子医科大学 URA 事業の進捗状況について

2. URAの職務環境等整備の進捗状況について

本学URA職務環境等整備の進捗状況について

基礎研究と臨床研究の支援体制



現在までの東京女子医科大学URAの活動概要

- 国等の公的研究費に関する情報収集や国の政策動向
- 研究動向の調査
- 引用文献DBなどを用いた学内シーズ情報の調査
- 公的資金獲得支援業務
- 大学の研究戦略策定に関する業務
- 倫理委員会申請支援
- 成果報告書作成支援
- 実施計画書、研究計画書作成支援
- 学内施設移転計画に関する機器・設備関連のデータ収集・分析
- URA研修・教育プログラム（主幹校：早稲田大学）作成協力
- その他、情報収集（他大学URA関連研究会・シンポジウム等参加、国内外の研究者、URA及び類似職との意見交換等）

東京女子医科大学バイオメディカル・カリキュラム

岩瀬URA、遠藤URAら：
 事務・実務系の知識・経験に加えて、本学先端生命医学研究所BMC(バイオメディカル・カリキュラム:医療従事者以外を対象とした系統的医学教育)を受講し、研究に関する知識レベルを向上させた。
 当該プログラムは、受講した企業の研究者が、胃カメラ、内視鏡、AED、心臓の三次元画像を撮影するCTスキャナの開発に成功するなど、社会人教育を通じた技術移転促進の役割も果たしてきた。



1年間で学ぶ、系統的医学ダイジェスト

企業、研究所、病院などで業務に従事している工学系、薬学系等の技術者などを主な対象として、日常業務に従事しながら、医学全般についての系統的な知識を学べるようにスケジュールされた、1年コースの公開講座です。



出典：<http://www.twmu.ac.jp/ABMES/BMC/>

Harvard大学附属病院 Brigham and Women's Hospital訪問 (遠藤URA, 河原URA, 桐谷URA Mar.3-6, 2013)

- NIH Grant獲得数全米トップクラスの病院における
リサーチ・アドミニストレーションについて、院内の研究者、ならびに、
同病院出資Partners社の実務担当者らとディスカッション。

「グラントのライフサイクル」

- “PeopleSoft”
(資金管理・人事・給与等の雇用マネジメント)
- “InfoEd”
(提案書準備・研究プロジェクトに関する各種データ管理)
- “Insight”(会計モニタリング・報告)

- ⇒ 新規研究のアイデア
- ⇒ 研究資金の設定・提案書の作成
- ⇒ 施設内レビューを経て申請
- ⇒ コンプライアンス審査
- ⇒ スポンサー審査
- ⇒ 研究資金獲得
- ⇒ 会計準備
- ⇒ モニタリング等の費用負担
- ⇒ 請求・支払
- ⇒ 年次報告作成
- ⇒ 研究計画終了又は更新⇒ (そして再び、新規研究のアイデアへとつながる「グラントのライフサイクル」)

その他、Pre-Award/Post-Awardの支援体制、グラント管理システム、研究による間接経費・収益の動向、研修・教育プログラム体制、若手研究者支援体制、トランスレーショナルリサーチへの取組み、企業との共同研究、コントラクトの動向等についてヒアリング。



本学URA標準業務の策定

東京大学「リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備（スキル標準の作成）」事業の動向に留意しつつ、URAの能力開発プログラムの策定に向けた検討

Pre-Award標準業務：

- ①研究動向・産業動向分析
- ②競争的資金に係る情報収集と学内提供
- ③学内シーズ情報の収集と分野横断的プロジェクト等の組織支援・調整
- ④共同研究契約業務支援
- ⑤臨床研究の受託研究費獲得支援
- ⑥メディカルライティング・申請書作成支援
- ⑦競争的資金獲得支援
- ⑧学内外ネットワーク等を通じた大学内及び他機関との連携・交流の企画・調整、
- ⑨産学連携・知財/倫理審査対応に係る専門的助言

Post-Award標準業務：

- ①研究プロジェクトの進捗管理・資金管理支援
- ②成果報告書/実績報告書作成支援
- ③広報・アウトリーチ活動
- ④知的財産等の管理・活用支援
- ⑤監査対応支援
- ⑥研究倫理・コンプライアンス対応支援と

本学URA事業独自の業務達成目標に係る自己申告書を作成

各URAにとっての
 「この1年間で担当した業務の難易度・遂行度等」
 「URA事業への理解度」
 「URAの研究支援業務とは」
 「今後取り組みたい業務・企画と行動計画」
 ・ ・ ・等の項目によって構成。

URA業務の評価の一助とする予定。

自己申告書 (URA)

氏名: _____ 所属: _____ 職員番号: _____ 入職年月: 年 月

< 現行業務に関して >
 この1年間で担当した業務の難易度・遂行度等

業務①	この1年間で担当した業務の難易度・遂行度等				評価
項目・基準	A	B	C	D	
難易度	難しい	やや難しい	普通	やや易しい	
遂行度	非常に良くやったと思う	良くやったと思う	普通	やや足りない	
適性	最適である	ほぼ適している	普通	やや不適	

< 課題及び意見等 >

業務②

項目・基準	A	B	C	D	評価
難易度	難しい	やや難しい	普通	やや易しい	
遂行度	非常に良くやったと思う	良くやったと思う	普通	やや足りない	
適性	最適である	ほぼ適している	普通	やや不適	

< 課題及び意見等 >

< URAの研究支援業務とは >
 URAの研究支援業務について、ご自身の理想をお書きください。(字数制限なし)

< 今後取り組みたい業務・企画と行動計画 >
 次の1年でURAとして取り組みたい新しい業務・企画等について、その行動計画についてお書きください。

業務①	目標

< 行動計画 >

業務②	目標

< 行動計画 >

< 備考 >

3. URAシステムの定着・運営の安定化に関する 取組状況

URA組織体制の学内認知を高める活動について

■2013年7月～11月：本学研究施設の移転計画への貢献：

研究系URAが各病院診療科の研究室を訪問。本学研究者らに研究環境に係る要望等のヒアリングを含む実態調査を実施の上、詳細なデータを作成。これらのデータは、現在進行中の本学総合研究所執行部が行う研究施設移転計画にも反映されている。

■2013年10月：「科研費応募支援セミナー」開催。

■2013年10月：「科研費申請書 書き方のコツとピットフォール」に関する本学URAオリジナル教材を作成の上、学内イントラネットで配布。

■学内研究者の科研費申請書作成支援実施：

研究目的・意義、方法論、倫理・コンプライアンス対応、研究経費・エフォート、業績等の事項に関する助言及び添削を行うことで、専門性の高いレベルでのコンサルティングが実現。

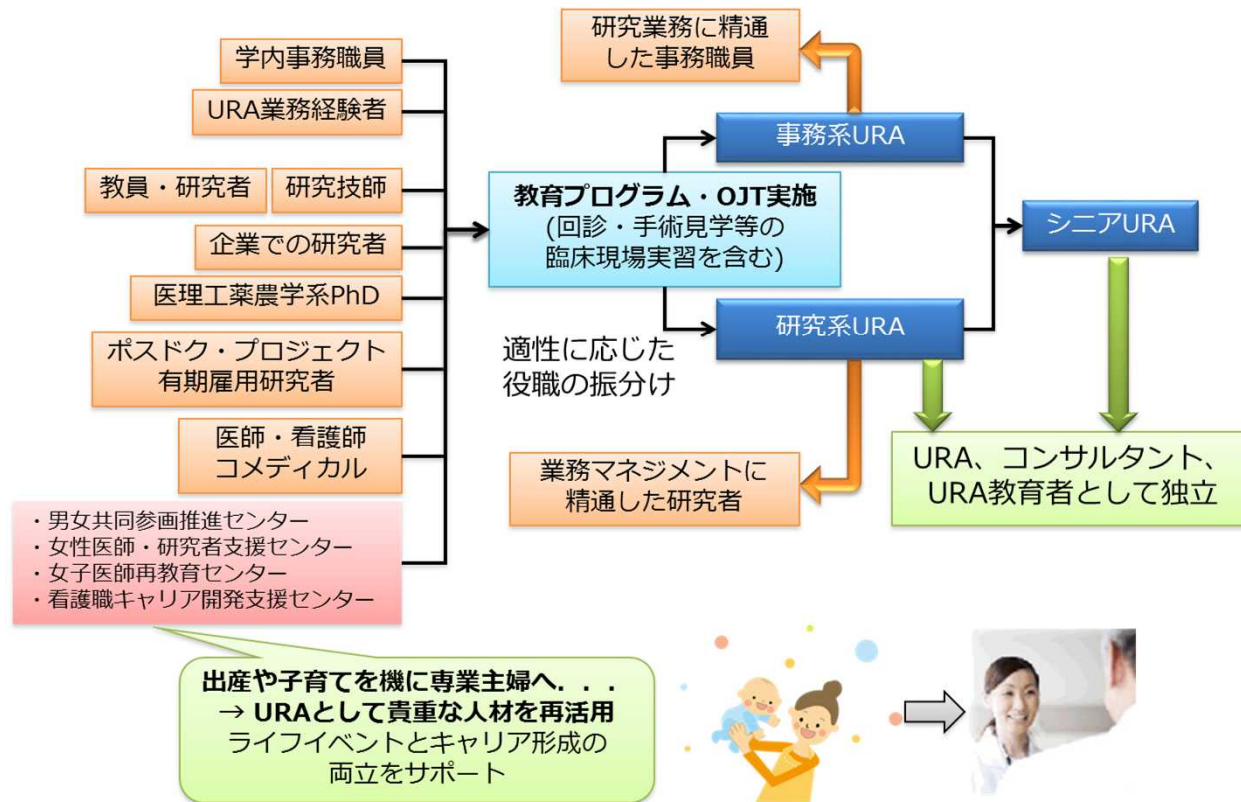
■2013年10月：本学病院の臨床研究支援センターセミナー協力：URAによる倫理・コンプライアンスに関するレクチャーを実施。

■2014年1月：「学内研究交流セミナー」の開催支援。本学の研究者同士の交流の促進、URAと研究者とのコミュニケーションの活性化に寄与。

■2014年2月：大学・企業の研究開発、特許出願に関する知財セミナーを企画・開催。

URAキャリアパス形成に向けた検討について

URAのキャリアパス



本学全体におけるURA事業の意義

平成25年度の本学全体の計画：

- 1) 再生医療の国際臨床研究の推進
- 2) 細胞シート工学を基盤とした再生医療臨床研究の推進
- 3) 先端医療機器開発（①薬剤併用集束超音波治療器、②手術ナビゲーションシステム、③入院患者転倒・転落予防センター等の活動）

⇒「トランスレーショナル・リサーチを視野に入れた臨床研究支援センター(iCLIC)との連携強化：①新しい医薬品・医療機器・治療方法のシーズを育てる支援（研究計画・申請・倫理審査・PDMAなどの指導）、②治験・医師主導臨床試験や実践研究の推進、③ITを用いた生物統計・臨床情報、臨床疫学を基盤にした評価実証研究の推進、④物療法や手術療法の個々の症例での有効性の判定等に係る活動

⇒URA事業が果たしている具体例：最先端研究開発支援プログラム「ナノバイオテクノロジーが先導する診断・治療イノベーション」（東京大学が研究代表）における音響活性薬剤と収束超音波を併用した音響化学療法、CREST、経済産業省国際標準化事業、課題解決型医療機器等開発事業、文部科学省未来医療研究人材養成拠点形成事業、JST再生医療実現拠点ネットワークプログラム等の支援・推進。

⇒がんペプチドワクチン、自家がんワクチンの開発等の産業化、薬事承認申請を目指した臨床試験・医師主導治験の推進のサポートも実施中。

大学等独自の経費によるURA組織体制維持の具体的計画について

■平成22年度に帰属収支差額における収入超過を回復して以来、平成24年度決算見込みに至るまで堅調な推移。

■但し、平成21年度まで7年間続いた帰属収支差額における支出超過やその期間に発生した財務上の負担が、本学の運営における財政面からの大きな制約要因となっているのも事実。

■このような状況から早期に脱却し、前向きな投資を円滑に遂行していくため、目下、本学全体として強い財務体質の確立を目指し、従来の慣習に捉われず、全学一体となった財務体質の改善に向けた取組みとともに、URAの定着及び組織体制維持も確実にはかっていく予定。

4. URAシステム整備(改革)に対する学長及び関係役員の責務について

URAシステム整備(改革)に対する責務に係る 学長・関係役員が主体となった取組状況

- 1) 競争的研究費等の採択件数の増加と適正な資金管理に向けた取組み
- 2) 新規の私学助成予算への対応
- 3) 臨床研究支援センターの体制構築
- 4) 基礎研究から臨床研究への橋渡しの強化
- 5) 各種倫理審査委員会の支援体制の強化、整備、等

■本学の研究支援部と、病院の臨床研究支援センターとの緊密な関係の構築は、TRCセンターを主軸とした本学URA事業の喫緊の課題。

■各URAの専門性に応じて、病院の臨床研究支援センターCRC（Clinical Research Coordinator：臨床研究コーディネーター）等との協働作業を展開中。

■今後、円滑な研究支援・推進のための運用体制を検討し、学長のリーダーシップの下、関係役員間の調整を更に進め、本学TRCセンターの支援による新規医療技術の発展について広く周知させる予定。